



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 362号 2011.5.6 発行 社会政策研究所

連休中に届いた各地のニュースを地方紙を中心に拾ってみました。【kobi】

イラストや文字で円滑に コミュニケーションボード導入

大阪日日新聞 2011年5月3日

イラストや文字で円滑な意思疎通を図るため作られたコミュニケーションボード

障害者や外国人らとの言葉のやりとりがスムーズにいかない場合、イラストや文字で円滑な意思疎通を図ろうと、大阪市交通局は昨年度末、地下鉄の改札窓口などにコミュニケーションボードを導入した。実際に役立つケースが報告される一方、どのように利用を促していくかが課題となっている。

ボードはA4サイズで6枚一組。「どこへ行きたいのか」「忘れ物・落し物を探しているのか」といったよくある質問をテーマごとにまとめ、職員“謹製”のイラストと、英語や中国語など4カ国語で示す。これまで障害の種類と重さによっては言葉でやりとりしにくかった人や、増加が期待されるアジアからの観光客に対応していく狙いがある。

ホワイトボードのように水性ペンで消し書きしながら使えるほか、ひらがなや数字だけの面もあり、指し示しながらやりとりできるようにもしている。

社会貢献の一環で企画。昨年には、より実用性の高いものを目指し、知的障害や聴覚障害のある人の意見も聞き取りながら、要望の一部を取り入れて完成させた。

ことし3月末には、地下鉄、ニュートラムの駅長室全120カ所や改札窓口全234カ所、バスの全719両と営業所10カ所に設置した。

約1カ月で使用実績は6件。3件は外国人で、3件は障害者だったが、全てのケースで問題は解決したという。ただ、設置場所に対して利用回数があまりにも少ないのが現状。同局担当者は「今後PRしていければ」と話す。

他都市では、横浜市でもコミュニケーションボードが導入されており、参考にしたと担当者。ただ、大阪版のオリジナルとして事故などの非常時に対応するためのボードも用意。「お客への対応をより良くしていきたい」としている。



「美味しい社会貢献...」「ちゃぶ台食堂」が大賞 世田谷のソーシャルビジネスコンテスト

東京新聞 2011年5月5日

子育てや商店街活性化など地域の課題に取り組むソーシャルビジネスのコンテストが世田谷区であり、起業済みの事業者部門で障害者施設の食品を販売するソーシャルエナジー

(経堂)の「美味(おい)しい社会貢献プロジェクト」、創業前のアイデア部門で女性会社員のコミュニティーカフェ「ちゃぶ台食堂」がそれぞれ大賞に選ばれた。

ソーシャルエナジーは、飲食業界で働いていた木村知昭社長(36)が二〇〇九年に障害者の同僚らと設立し、全国の障害者施設で作るコメや野菜、菓子などをネット販売している。一年前にはカフェをオープンし、研修会や交流会、映画上映会などのイベントにあわせて障害者施設の食品を使った料理を提供。区立砧工場のサラダ菜など、おいしくて送料を入れても採算のとれる三十余カ所の食品を厳選して扱っている。

障害者の支援につながり、社会貢献したい人のニーズを満たす方法として考えた。木村社長は「受賞は宣伝に役立つ。同種のビジネスがあちこちに広がれば、『言い出しっぺ』としてPRできる」と喜ぶ。

ちゃぶ台食堂は、区内で一人暮らしをする会社員橋本弘美さん(47)が「あったらいいな」と考えた。ご飯とみそ汁、漬物といったシンプルな食事と、ビールなどドリンクを提供し、総菜は商店街の店で買って持ち込んでもらう。コミュニケーション不足の単身者らが会話を楽しみ、くつろげる場にする。

コンテストは、区の外郭団体が創業支援の一環で初開催。区内で創業して五年以内の事業者部門と、区内で創業したい人のアイデア部門に計九十一件の応募があった。



障害者施設で作られた食材を販売する木村さん＝世田谷区で

被災障害者支える障害者組織 盛岡に発足

岩手日報 2011年5月3日

東日本大震災で被災した障害者のため、障害者自身が立ち上がった。自身も障害者である盛岡市の今川幸子さん(31)が代表となり同市に「被災地障がい者センターいわて」が発足した。阪神大震災を契機に生まれた被災地障害者支援のためのNPO法人「ゆめ風基金」(本部・大阪市)のバックアップを受け、被災障害者のニーズに即した支援を進める。

同センターは盛岡市本宮1丁目3の20、光立ビルに事務所を置いた。CIL(自立生活センター)もりおかの事務局長今川さんのほか、同基金理事の八幡隆司さん(53)、全国から駆け付けたボランティアの10人体制で活動している。

毎朝ミーティングをし、被災地へ出発。被害状況調査や安否確認を進めながら、食料や靴など生活物資を届けたり、部屋の片付けや買い物の代行などを行っている。

1995年の阪神大震災では、支援の谷間に置かれた障害者が逆境に屈せず自分たちで被災地障害者センターを立ち上げ、全国に支援を呼び掛けた。寄せられた物資やカンパを基に、介助者派遣体制や障害者用プレハブ建設、地域住民への炊き出しもした。

この経験を原動力に震災発生から5カ月後、基金運動がスタート。2001年にはNPO法人格を取得。呼び掛け人には小室等さん、永六輔さんらが名を連ねる。16年間で「ゆめ風基金」は2億円を超え、新潟県中越地震など国内のほか、ハイチ大地震など海外の被災障害者支援もしてきた。

東日本大震災で寄せられた救援金は早くも1億円を突破。宮城、福島県に続き、本県でも、自立生活を支援してきたCILもりおかと連携してセンターを設立した。

今川さんは「こんなことに困っている、こんな物が必要など、当事者がどんだん声を上げてほしい。迅速に細やかに応えたい」、八幡さんは「共生の街づくりという将来的な復興も見据えながら、当事者がより良く生きるための支援を続けていきたい」と語る。

問い合わせ先は同センター(電話・ファクス019・635・6226)へ。

被災地の障害者がつくった油麩販売 志摩のNPO法人

朝日新聞 2011年5月3日 三重

宮城県の障害者らがつくった油麩の商品を販売するコーナー＝志摩市阿児町賢島

三重県志摩市阿児町のNPO法人「TEAM笑美S（えびす）」は、東日本大震災で被災した宮城県登米（とめ）市の障害者就労支援施設がつくった油麩（ふ）などの食品を、志摩市阿児町賢島の土産店「以志川」で販売している。辻村知身理事長は「息の長い支援を続けたい」と話す。



NPO法人は、障害者の就労支援や地域活性化に取り組み、20年ほど前から登米市の職員と交流してきた。

辻村理事長は「被災地の障害者のために何か役立つことができないか」と登米市の職員に相談。市内の障害者就労支援施設「はらから福祉会」を紹介してもらい、施設で製造している宮城県特産の油で揚げた麩（250円）と、油麩を使ったレトルト丼（350円）を仕入れて販売することにした。伊勢志摩特産のアオサと油麩をセットにしたうどんも売り出した。

被災地には日用品などの救援物資を届けたが、長期化する被災者の避難所生活を支援するため、志摩市の障害者が、ござやうちわ、青竹踏みを作って送ることも検討している。

辻村さんは「復興が進めば、アオサを登米市で販売し、被災地とキャッチボールしながら一緒に頑張りたい」と話している。問い合わせは、NPO法人（0599・43・8111）。（松永佳伸）

知的障害者ら野菜送り被災地応援 奈良から福島へ

共同通信 2011年5月4日

被災地に送る野菜を手にする施設理事長の足高慶宣さん（右）ら＝4日、奈良県葛城市



「ぼくらの野菜を食べて元気になって」。奈良県葛城市の知的障害者更生施設「柊の郷」の障害者らが4日、手塩にかけて育て、収穫した野菜を、東日本大震災に遭った福島県いわき市の保育園に送った。敷地内の畑に毎日通い、手で害虫を取り除いた「愛情たっぷり」（職員）の野菜だ。

「野菜が足りない。いわき市に送ってほしい」。きっかけは同市の大倉保育園周辺でボランティア活動が続けるお笑い集団「大川興業」の大川豊総裁からの電話だった。施設理事長の足高慶宣さん（57）とは、数年来の友人。「それなら、いま収穫できる野菜は全て送ろう」と早速取り掛かった。

送った野菜はタマネギや、奈良県特産の「大和まな」など段ボール6箱分。約10年前から農業を始め、除草剤は一切使用せず、有機肥料を使って丁寧に育ててきた。味に甘みがあるのが特徴だ。

障害者自ら「書きたい」と提案し、思いを込めて何度も書き直した手紙や、色鉛筆で描いた絵も添えた。「元気をだしてがんばって」「ふっこうしてください」。20～70代と年齢はさまざまだ。

葛城市内のイベントで野菜を販売した売上金は、大川さんらに送り、活動を支援する。周囲の農家にも協力を呼び掛けた。「必要な限り、野菜を送り続けたい」。足高さんは力を込めた。

アルミ缶ふた外し簡単に 障害者施設の作業応援

京都新聞 2011年5月5日

缶を24本セットできる回転式の機械。箱の中をくぐる間にステンレスの刃を降ろし、ふたを切り落とす（京都市西京区・すずかけ）

京都市南区で板金加工業を営む梅原幸男さん（64）＝西京区＝が、アルミ缶をリサイクルしている障害者施設のために、缶からふたを簡単に取り外せる機械を製作した。缶をつぶしやすく、中からゴミも取り出しやすくなるといい、缶24本を一度にセットし、効率化を図った新作も障害者の意欲も上げると好評だ。梅原さんは「障害のある人に楽しく働いてもらえればうれしい」と誇らしげだ。



アルミ缶リサイクルに取り組む障害者施設は、缶を回収業者に売って利用者の工賃にしている。ただ、缶の中にタバコの吸い殻や飲料が残っていると回収してもらえない例もある。梅原さんは約1年前、次男で知的障害のある健太さん（26）が利用した支援施設「京北やまぐにの郷」（右京区）でこの話を聞き、ふたを取る機械を考えたい、と申し出た。

最初に作ったのは、高さ約60センチの箱形の機械。中に缶を一本ずつ入れ、内蔵されたステンレス製の刃でふたを上から切り落とす。早速「やまぐにの郷」で導入し、スチール缶からアルミ製のふたを取り外してアルミのリサイクル増につなげた。

作業効率を上げるために作った「回転式」は同様の仕組みの箱の下に直径90センチの作業台を設け、台上にセットした缶が次々と箱の中をくぐるようにした。設計には友人の会社役員坂本進さん（64）＝南丹市＝も協力し、梅原さんは本業の合間にプレスや溶接などを重ねて2カ月かけて完成させた。

利用する西京区の生活介護事業所「すずかけ」では、川西智子所長は「回転が面白いのか、アルミ集めに興味がなかった利用者がやる気になっている」と喜ぶ。梅原さんに、ふたの取り外しと缶の圧縮を連続してできる機械も作れないかどうか依頼している。

瑞穂の知的障害者でつくる瑞宝太鼓 プロ化10年、長崎で15日記念公演

長崎新聞 2011年5月3日



10周年記念コンサートや東北巡業に向け、練習に励むメンバー＝雲仙市、南高愛隣会

知的障害者でつくる雲仙市瑞穂町の和太鼓グループ、瑞宝太鼓（岩本友広団長）がプロになって10年。15日には長崎市公会堂で記念コンサートを開き、6月には東日本大震災の被災地を巡業する。節目のイベントやボランティア活動に向け、練習場の南高愛隣会（通称・コロニー雲仙）体育館には迫力のある和太鼓と、軽快なか

ねや笛の音が響いている。

瑞宝太鼓は、知的障害者職業訓練施設「長崎能力開発センター」のクラブ活動として1987年に発足。団員たちの「仕事を持ちたい」との希望をかなえ、2001年4月にプロとして活動を始めた。現在、年間の公演は100回以上。和太鼓の愛好家や障害者を対象にした指導にも取り組んでいる。

昨年8月には国内最高峰の和太鼓の競技会「第9回東京国際和太鼓コンテスト」で優秀賞（2位）を獲得。団員の日常や思いに迫ったドキュメンタリー映画「幸せの太鼓を響かせて～INCLUSION（インクルージョン）～」(小栗謙一監督)も完成し、28日から東京、大阪で公開。長崎市のセントラル劇場でも6月25日から上映する。

東日本大震災で甚大な影響を受けた岩手県陸前高田市や宮城県気仙沼市などは団員が何度も公演を行い、地元の人たちと交流し続けている地域。岩本団長（34）は巡業を控え「テレビで被害を見て、悲しい気持ちになった。和太鼓で皆さんを元気づけたい」と練習

に熱を込める。

15日のコンサートは午後2時開演。世界的な和太鼓奏者、時勝矢一路氏作曲の「漸進打波」などを披露。映画の先行上映も行う。問い合わせは瑞宝太鼓事務局（電0957・77・3934）。

光と愛の事業団 障害者就労支援に2団体へ助成金

読売新聞 2011年5月5日 鹿児島



←購入した巻き上げ機を使って竹を運び出す「愛・あいネット」の通所者たち
苗の株分け作業をする「明りの家」の若者たち→

福祉作業所で働く人たちを支援する読売光と愛の事業団の「生き生きチャレンジ」助成事業に、県内からは、障害者の自立支援活動を行っている鹿屋市のNPO法人「愛・あいネット」と、奄美市の就労支援施設「明りの家」が選ばれた。



「愛・あいネット」（柳井谷昭平理事長、38人）は、障害者へのパソコン技術訓練や竹を利用した飼料、堆肥（たいひ）の生産などを通じた就労支援活動を行っている。

今回、光と愛の事業団から20万円の助成を受け、伐採した竹の運搬に必要な巻き上げ機を購入。同市串良町の竹林で、通所者らが巻き上げ機を使って竹の搬出作業に励んでいる。

竹を粉砕機で粉々にした竹パウダーは、鶏の飼料や牛や豚の敷き床材などとして販売しており、ふん尿のにおいを軽減する効果などから利用する農家の評判も良いという。

しかし、急斜面の多い竹林では、伐採した竹を運ぶのは重労働で、危険を伴うことも多かった。柳井谷理事長（51）は「作業効率が向上することで生産性もアップし、通所者の賃金を上げることが出来る」と喜んでいて。

「明りの家」施設長の恵川龍一郎さん（49）は、かつて京都で福祉施設を運営。「古里の奄美で、精神障害者のための作業所をつくりたい」との思いで、必死に働いてためた2000万円を投じ、2000年、島内で初めての精神障害者共同作業所を開設した。

現在、精神、知的、身体に障害のある18～40歳の男女十数人が働く。のり面用などに販売するヨモギなどの採取、株分け作業のほか、公民館の清掃作業などを行っている。

就職先が少ない離島の奄美で、障害者が職に就くことは難しい。そこで、障害者の働く場を生み出そうと、奄美の植物・ゲットウを栽培し、アロマセラピーや化粧品に使われるエッセンシャルオイルなどに加工、インターネットで販売する計画に取り組んでいる。

助成金30万円は、加工に必要なオイルメーカーなどの購入費に充てる予定。恵川さんは「事業を進めて、障害者のみなさんに工賃をより多く支払い、結婚や子育てなどの目標を持てるようになれば」と語った。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行